



二見港の概要

東京から約1,000km南の太平洋上に位置する小笠原諸島。その中心である父島の二見港は、本土と小笠原を結ぶ唯一の交通アクセスの拠点です。

二見港では、昭和43年の本土復帰以降、岸壁や防波堤などの整備が進められ、現在では、父島と本土を結ぶ定期船「おがさわら丸」、父島と母島を結ぶ定期船「ははじま丸」の発着港として島民の生活や経済を支えるとともに、周辺海域の監視や避難、補給の拠点としても重要な役割を担っています。

世界自然遺産登録から15年を迎えた現在、二見港は、世界に誇る小笠原の自然環境の保全と利用を図りながら、島民の生活を支える社会基盤インフラとして発展を続けています。



定期船(左)とクルーズ船(右)が停泊中の二見港

島民の暮らしを支える唯一の生命線

父島と本土を結ぶ定期船「おがさわら丸」は、おおむね6日に1便、片道約24時間をかけて運航されています。空港のない小笠原において、人の移動はもとより、日々の暮らしや産業を支える物資も二見港を経由して運ばれています。

このため、定期船の入港日には、生鮮食品を求めて多くの島民が商店に足を運び、島の暮らしが船の運航に合わせて営まれていると実感できます。

本年7月には、現在運航する三代目「おがさわら丸」が就航10周年を迎えました。島民や観光客が見守る中で開催された記念式典では、長年にわたり父島と本土を結び続けてきた功績に感謝が寄せられ、港と船が地域にとってかけがえのない存在であることが改めて示されました。

クルーズ客船がもたらす新たな賑わい

二見港では、岸壁に接岸可能な船舶は1万トン級までですが、港内に整備された係船浮標により、5万ト

ン級の客船を受入れることができます。

本年6月には「飛鳥Ⅲ」が初入港し、さらに「三井オーシャンサクラ」の初入港も予定されています。クルーズ客船の寄港時には島全体が歓迎ムードに包まれ、定期船の入港時とは趣の異なる華やかな賑わいが生まれます。

今後、クルーズ関連事業者等を対象としたファームトリップを実施し、小笠原の魅力を活用したクルーズ商品の造成を促進します。これにより、寄港需要を創出するとともに、持続的な港湾利用の拡大と地域経済の活性化を目指します。



係船浮標に係留する飛鳥Ⅲ

島民に愛され、ともに育まれる港

港湾施設周辺では、船舶の運航などに支障のない範囲で、夏季に遊泳エリアや、高校のウインドサーフィン授業に利用される水域を設けています。

また、船客待合所は、南洋踊りや出航太鼓の練習会、地域イベントなどが開催される交流拠点としても利用されており、多くの島民に親しまれています。物流、防災、観光、教育、文化交流。そのすべてが港に集約され、地域とともに息づいているからこそ、二見港の最大の魅力です。



ある日の定期船「おがさわら丸」の出港風景

能登復興を支える七つの港（能登の港）

推薦：七尾市／穴水町／能登町／珠洲市／輪島市／石川県



能登半島地震からの復興に向けて

古くから港町として栄えてきた能登の七つの港（みなとオアシス登録：七尾港、和倉港、穴水港、宇出津港、小木港、飯田港、輪島港）は、令和6年能登半島地震による強い揺れや地盤隆起、津波により、これまで経験したことのない甚大な被害を受けました。



現在、物流機能の確保やなりわいの再建に向けて施設の段階的な利用再開を進めるとともに、各港において本格復旧事業を着実に進めています。

復旧にあたっては、地域の将来を見据えた創造的復興にも取り組んでいます。震災から復旧3年目を迎える中、施設復旧と並行して祭りやイベントが再開され、地域住民や観光客が集う賑わいの拠点として重要な役割を果たしています。

港を核とした賑わい創出

①七尾港

マリナーパーク内にある能登食祭市場周辺の園路の一部が復旧し、市民や観光客が再び海辺に集える環境が整いつつあります。5月には「青柏祭」が開催され、日本最大級の曳山「でか山」が市街地を巡行し、多くの来訪者で賑わうなど、復興へ向かう能登の活力を広く発信しました。

②和倉港

和倉温泉の景観や利用環境にも配慮しながら護岸復旧を進めています。10月31日(土)、11月1日(日)には「Sea級グルメ全国大会inななお」の開催が予定されており、全国のみなとオアシスから自慢のグルメが集結することで、多くの来訪者呼び込み、地域の交流促進と賑わい創出が期待されています。

③穴水港

川島地区物揚場の応急復旧により災害廃棄物の搬出を効率的に行い、地域復興を後押ししました。例年あすなろ広場で開催されていた「雪中ジャンボかきまつり」は、代替イベントとして商店街を会場に穴水産カキの販売や飲食提供が行われ、多くの来訪者で賑わい、地域の元気を発信する機会となりました。

④宇出津港

地盤沈下による被害を受けた港湾施設や宅地の冠水対策等を実施しながら利用環境の確保を進めています。7月には勇壮さで人々を魅了する「あばれ祭」が開催さ

れ、燃え盛る大松明の中を「キリコ」と呼ばれる奉燈が練り歩く迫力ある祭りに多くの住民や観光客が集い、地域の再生を象徴する大きな賑わいを創出しました。

⑤小木港

九十九湾の物揚場の応急復旧により観光シーズンにあわせて遊覧船の運航を再開しました。「イカキング」で知られるイカの駅つくモールでは各種イベントやフェスが開催され、県内外から多くの観光客が訪れるなど、港を中心とした観光振興と地域活性化につながっています。

⑥飯田港

公費解体により発生したコンクリート殻を活用した埋立地造成を進めるとともに、将来の魅力向上につながる利活用を検討しています。7月には江戸時代初期から続く伝統的神事である「燈籠山祭り」が開催され、豪華絢爛な燈籠山が町内を巡行し、帰省者や観光客も加わって大きな賑わいを創出しました。

⑦輪島港

地盤隆起により利用が困難となった港湾緑地内の親水性護岸を平面化し、新たな交流広場が整備されました。また、8月の輪島大祭では復興への願いを込めたキリコ巡行に大勢の市民や観光客が集まったほか、来年には岸壁の復旧にあわせたクルーズ船の寄港も予定されるなど、賑わいと交流の拠点として再生しつつあります。

復興を支える港の力

このように能登の各港は、震災からの復旧・復興を支える物流基盤としての役割に加え、祭りやイベントを通じて地域に人を呼び込み、交流と賑わいを創出する拠点として大きく貢献しています。

復旧・復興にあたり多大なご支援をいただいた国や全国の地方公共団体をはじめとする皆様への感謝を胸に、七つの港は復興のシンボルとして活力を創出しています。



青柏祭（七尾）



下関港の概要

下関市と韓国の釜山広域市は昭和51年に姉妹都市となり、今年で50年の節目を迎えます。両市を結ぶ航路として、日本初の国際定期フェリーとして就航した関釜フェリーが、現在、毎日運航し、日本最大級の国際フェリー基地を形成しております。この関釜フェリーを中心に、下関港は、東アジアに近い地理的優位性や良好な国内交通アクセスに加えて、迅速な検査体制を活かしたスピーディーかつ定時性の高い国際複合一貫輸送サービスを特長として掲げ、東アジアのゲートウェイとして重要な役割を果たしております。

地域の経済社会を支える下関港

下関港では、輸出が好調で令和6年、7年と2年連続で1兆円を超えており、特に令和7年は半導体製造装置の輸出は韓国向けで1位、中国向けでは成田空港に続く2位となっております。

平成21年に一部供用を開始した長州出島には、現在、釜山へのコンテナ航路が就航する他、新港2号岸壁が供用を開始した令和5年からは、中古自動車の取り扱いが急増し、中国・九州エリアにおける中古自動車の輸出拠点化が進んでおります。さらに、令和7年から鋼材の取り扱いを開始し、貨物量が令和6年と比較しても、約3倍に急増しております。加えて、産業振興用地の分譲も好調であり、現在、全24区画のうち12区画が売却済みで、残る区画のうち10区画について、この7月に三菱重工業と売買仮契約を締結したところであり、さらなる貨物量の増加が見込まれます。

地域の人流拠点である下関港

下関港では、クルーズ船の寄港予約数について、官民一体で進めているポートセールスや寄港時のおもてなし、さらには、全国クルーズ活性化会議の会長港として、当会議で初となる総会の地元開催が功を奏し、令和8年にはコロナ禍以降最高の34隻が寄港する予定です（令和8年8月末時点）。さらに、令和8年からクルーズ旅客の受入施



写真1 クルーズ船のお見送りイベント

設の整備を開始しており、さらなるクルーズ振興が見込まれます。これらにより、下関港は人流の拠点として一層の進展が期待されております。

地域の賑わいや観光を支える下関港

関門海峡に面したあるかぼーと地区には、令和7年にリニューアルオープンした海響館（水族館）や観覧車などのアミューズメント施設により、多くの市民や観光客が集まっています。また同年に、星野リゾートの「リゾナーレ下関」が開業し、アメリカのニュース誌「TIME」が発表した「2026年 世界で最も素晴らしい場所」の一つに選出されました。さらに、恒常的な賑わい創出とクルーズ船寄港時の受入体制強化を目指し、新たな観光プログラム「海峡ドローンアート」を毎月1回開催しました。こうした「新しい観光資源」の取組みが評価され、「ドローンショーアワード2025 Under300」部門でグランプリに選ばれました。令和8年からはこれらの賑わいを更に発展させるため、「みなと緑地PPP」制度の活用に向け、事業者と協議を進めております。

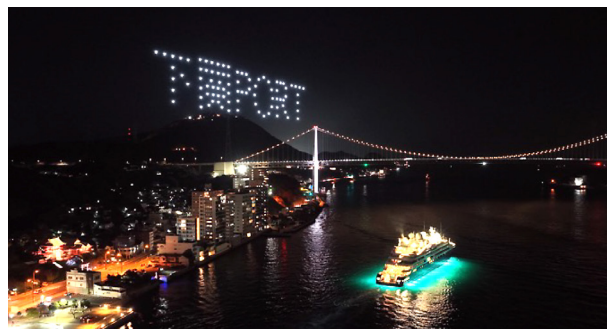


写真2 海峡ドローンアートとクルーズ船

脱炭素社会に向けたみなとづくりを推進する下関港

令和6年12月、長州出島において、九州地方整備局管内で初のLNGバンカリング船による貨物船へのLNG燃料供給作業を行うなど、LNGバンカリング供給拠点化を進めております。また、令和7年6月には「下関港港湾脱炭素化推進計画」を作成し、企業・団体・関係行政機関とともに下関港の脱炭素化に向けた取組を進めております。

西山及び長府の両地区では、ふ頭背後にそれぞれ令和4年と令和6年に国内最大級となるバイオマス発電所が相次いで建設、運転開始されました。海外から輸入した木質ペレットを主燃料として発電を行い、再生可能エネルギーの供給拠点となっております。

加えて、福浦地区において、二酸化炭素の吸収源にもなる海浜を整備すべく、令和4年から現地調査を実施しております。